

## 平成 27 年度 薬剤科活動実績報告書

西川 眞佐人<sup>1)\*</sup>、高橋 千鶴<sup>1)</sup>、藤沢 希世子<sup>1)</sup>

要旨：我々は、人員不足ながら病院薬剤師として行うべき業務内容を拡大するため、手順の見直しや削減に努め、患者に対して適切かつ安全な薬物療法が行えるよう業務に取り組んでいる。なかでも、化学療法調製では手順の見直しやお薬手帳へのシール（注射剤）の貼付、病棟業務では服薬指導件数の増加、その他チーム医療への参画などに積極的に取り組んできた。今回我々は、これらを中心とした平成 27 年度の活動実績とその自己評価について報告した。

キーワード：薬剤管理指導、化学療法、持参薬

### PERFORMANCE REPORT

## Report of FY 2015 Activity Results of the Department of Pharmacy, Mutsu General Hospital

Masato Nishikawa<sup>1)\*</sup>, Chizuru Takahashi<sup>1)</sup>, Kiyoko Fujisawa<sup>1)</sup>

**Abstract:** Although there is a shortage of staff, we have tried to reconsider and reduce various procedures employed so far, to expand inversely and reconstruct the content of duties which should be included as updated works by modern “hospital pharmacists”. We believe that such are necessary in contributing to appropriate and safe drug treatment for patients. Especially, we have reconsidered and adjusted the procedures of handling anti-cancer injection drugs given to cancer patients, and have stuck stickers of the injection drugs on the pages of the medicine pocket diary of the patients. For hospitalized patients, we have aggressively tried drug administration guidance and subsequently the number of guidance has increased. Further, we have participated in team medical treatment as one of our specialties. In the current report, we demonstrate our activities in FY 2015 with statistics and an estimation of the results.

Key words: Drug management instruction, Chemotherapy, Bringing medicine

---

<sup>1)</sup> Department of Pharmacy, Mutsu  
General Hospital, 1-2-8 Kogawa-machi,  
Mutsu, Aomori 035-8601, Japan  
Corresponding Author: K. Fujisawa  
(k\_fujisawa@hospital-mutsu.or.jp)  
Received for publication, August 4, 2016  
Accepted for publication, October 5, 2016

<sup>1)</sup> むつ総合病院薬剤科  
責任著者：藤沢希世子  
(k\_fujisawa@hospital-mutsu.or.jp)  
〒035-8601 青森県むつ市小川町一丁目 2 番 8  
号  
TEL: 0175-22-2111 FAX: 0175-22-4439  
平成 28 年 8 月 4 日受付  
平成 28 年 10 月 5 日受理

## はじめに

H28年4月現在、むつ総合病院薬剤科(当科)では薬剤師13名(平成27年度は14名)薬剤助手6名にて構成され、夜間・休日は当直薬剤師1名での24時間体制にて各種業務へ対応をしている。

今回、平成27年度の活動内容をまとめ、業務実績の集計と活動計画目標に対しての評価を行ったので、報告する。

## 活動計画目標と業務実績

### (1) 平成27年度の活動計画目標

- 1) 入院患者の持参薬の管理
- 2) 抗MRSA薬の処方計画への参画
- 3) 適性在庫と採用医薬品の整理
- 4) 病棟薬剤業務実施加算に向けた準備
- 5) 病院薬剤師会等での研究発表

1)～4)は、平成26年度目標の継続である。

### (2) 処方箋枚数

平成27年度、当科で調剤された処方箋枚数は外来処方箋32,238枚(月平均2,687枚)、入院処方箋40,969枚(月平均3,414枚)であった。平成25年度～平成27年度までの3年間の処方箋枚数をFig.1に示す。外来処方箋枚数が減少傾向にあるが、これは、長期投与による処方枚数の減少によるものと考えられる。入院処方箋枚数の平均は38,598枚。3年間を比較すると年間の枚数に変化は見られなかった。

当科の基本業務である調剤については、医療の安全確保のための薬歴に基づいた処方監査を行っている。疑義照会の他、電子カルテを利用し医師のコメント、検査情報などを参考とする場合もあった。画面監査と最終監査は別の薬剤師が行うダブルチェックを基本にしている。

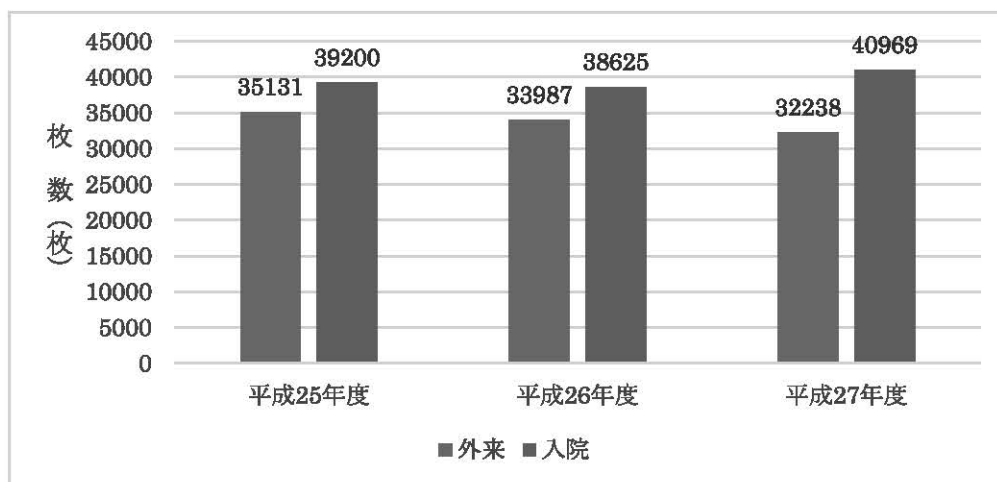


Fig.1 年度別処方箋枚数

### (3) 薬剤管理指導件数

薬剤管理指導の算定対象は入院患者となっている。業務の総件数は4,139件(月平均344件)で、内訳は特に安全管理が必要な医薬品<sup>1)</sup>を使用する患者は1,262件(月平均105件)、麻薬を使用する患者は79件(月平均7件)、その他2,798件(月平均233件)であった。

服薬指導は特に安全管理が必要な医薬品を中心に、手術前投薬、自己管理目的、化学療法

導入、麻薬導入等について行った。さらに、投与されている薬剤について、副作用、相互作用、用法・用量、検査値などのモニタリングも実施。患者選別は、病棟からの依頼が主で、クリティカルパスの対象患者も含まれた。その他、病棟担当薬剤師から必要と思われる患者の依頼要請をする場合もあった。また、算定外ではあるが、外来化学療法の導入、インターフェロン製剤の自己注射導入等外来での指導も行ってい

る。

#### (4) 入院患者の持参薬管理

5階北病棟をモデルケースとし、持参薬鑑別の手順・内容を検討してきた。5階北病棟の持参薬鑑別総件数は173件（月平均14件）であった。鑑別後の情報を電子カルテ2号紙へ載せることで情報の共有、活用が出来ようになった。しかし、他病棟からの依頼も増え、業務の改善と拡大は出来たが、業務量の増加で煩雑となり対応が困難となる場合があった。

#### (5) 入院注射処方箋枚数

入院注射処方箋枚数は68,186枚（月平均5,682枚）であった。病棟で投与される注射剤は、注射処方箋を基に、薬剤師が投与速度、投与量、配合変化、禁忌等の確認を行っている。注射薬は個人毎に患者氏名、薬品名、投与量、投与時間等を記載したラベルを貼付し、一施用を基本に取り揃えて病棟へ払い出している。メンタル病棟以外の各病棟を対象に行っている。（メンタル病棟は、定時の処方箋件数が少ないため）

#### (6) 無菌調製件数

注射処方箋のうち無菌調製の対象となっているのは感染リスクの点から、高カロリー輸液（中心静脈からの栄養輸液）と麻薬ポンプとなっている。調製件数は高カロリー輸液が307件（月平均26件）、麻薬ポンプは49件（月平均4件）となっている。麻薬ポンプの充填は依頼があった場合に対応をした。依頼内容は外来で継続、入院患者が在宅医療で継続、外泊時の使用等であった。

#### (7) がん化学療法調製件数

がん化学療法調製件数は外来1,426件（月平均119件）、入院914件（月平均76件）であった。

調製にあたっては、がん化学療法開始前に医師より提出されたレジメンを参照し、注射処方箋から投与量、投与間隔などの処方監査、薬剤の取り揃えを行った。調製は外来化学療法室に

隣接された調製室の安全キャビネット内で行っている。薬剤師2名により、薬剤名、抜き取り量等の確認を行い、手書きで薬歴を作成している。その他、がん化学療法レジメンの作成、管理も行っている。

外来でがん化学療法を受ける場合は、お薬手帳へ化学療法の内容シールを貼付し、調剤薬局への情報提供が出来るようにした。シール貼付時には副作用の確認、服薬指導も行っている。

#### (8) 適性在庫と採用医薬品の整理

新規採用薬品24品目に対し、中止薬品は41品目であった。当科では在庫管理システムにより、医薬品の使用量を把握し、そのデータを基に適正な在庫量を保つように努めている。各外来・病棟、他部署等の薬剤は薬剤師が定期的に期限、保管状態、在庫数の点検を行い、減耗薬剤の削減に努めた。使用頻度の少ない薬剤をピックアップ、同機序、同効薬などの整理を行っている。

#### (9) 院内（薬剤科以外）の医薬品の管理

手術室は毎月、その他部署は2ヶ月に1度、薬剤師が点検を行った。内容は有効期限、保管状態（遮光、冷所、金庫、鍵など）、在庫数、保冷庫の温度、表示（陳列、注意喚起シール）等。その他、消毒剤の開封後の使用期限、分割使用薬剤の使用期限等。点検結果は各部署の責任者へ報告を行った。

#### (10) 院内製剤の調製

院内製剤の調製数1,620件（月平均135件）。検査・手術室で使用する消毒薬各種、化学療法による口内炎治療薬「キシロカイン・アズノール含嗽液」、切迫早産治療薬「ミラクリッド膈坐薬」、環境用・排泄物用消毒薬「テキサント消毒液」等が件数の多い製剤であった。

(11) チーム医療への参画による安全性の確保と質の向上

##### 1) 感染対策室

抗菌薬ラウンドへの参加（週1回）、抗菌薬の使用状況の把握。

## 2) 褥瘡対策及び栄養サポート運営委員会

ミーティングとラウンドへの参加(週1回)。

## 3) 糖尿病ケア委員会

患者向けに以下の教室で、講師として患者教育を行った。

糖尿病教室：週1回開催 15分(毎週)。糖尿病ミニ教室：5講座(年間) 15分。

## 4) 緩和ケアチーム

ミーティング、ラウンドへの参加(週1回)。

### (12) 抗MRSA薬の処方計画への参画

7階病棟でバンコマイシン注が処方された患者に対してTDMを行い、その結果を基に投与量の確認、提案を行った。

### (13) 長期実務実習生の受け入れ

2期(9月~11月)、3期(1月~3月)に各1名ずつ実習生を受け入れた。受け入れ大学は青森大学薬学部、東北薬科大学であった。期間中、認定実務実習薬剤師を中心にすべての薬剤師が担当をし、コア・カリキュラムに従って指導を行った。

### (14) 教育・研修への参加

月に1~2回のメーカーによる勉強会をはじめ、各自院内外の研修へ参加し、研鑽に努めた。院内研修会では、安全対策、感染対策での講師を務めた。

### (15) 研究発表活動への参加

1) 第5回日本病院薬剤師会東北ブロック学術大会：山形市

「がん疼痛患者に対する処方提案と採用率」

発表者：清川明慶ほか。

2) 第25回日本医療薬学会年会：横浜市

「病棟薬剤業務実施加算費算定施設における病棟活動」

発表者：清川明慶ほか。

3) 平成27年度青森県病院薬剤師会会員研究発表会：青森市

「下肢筋力低下に対しHMG-CoA還元酵素阻害剤によるミオパチーを疑った1例」

発表者：清川明慶ほか。

## 評価

### (1) 持参薬確認への関与

持参薬の鑑別数は増加し、鑑別結果を電子カルテ2号紙にアップするように出来たことで達成出来たと評価する。ただし、鑑別業務が煩雑であり、時間も要するため業務の整理が今後の課題となる。

### (2) 抗MRSA薬の処方計画への参画

7階病棟で実績を残せたため達成出来たと評価するが、来年度の目標に残して他の病棟への参画を計りたいと考える。

### (3) 適正在庫と採用医薬品の整理

薬剤科で取り組んできたが、思うような成果が上がらなかった。来年度の目標に残し、勉強会など看護師を含め病院全体の協力を求めたい。

### (4) 病棟薬剤業務実施加算に向け活動する

7階病棟と6階病棟での病棟業務に介入をしている。現行の薬剤師数ではこれ以上の介入は難しいと考えるので、現行では達成と評価する。

### (5) 研究発表をする機会を増やす

研究発表は数件行うことが出来た。若手の研究発表は平成27年度内には出来なかったが、平成28年7月の発表にむけ準備中であつたため、来年度の目標に残して研究発表の成果を上げたい。

## 考察

活動目標の達成は、十分な内容とは言えない点もあるが、現構成人員で業務内容の充実を図るため、今後も業務の効率化、個々のスキルの向上に取り組むことが必須と思われた。

1) 抗悪性腫瘍剤、免疫抑制剤、不整脈用剤、抗てんかん剤、血液凝固阻止剤、ジギタリス製剤、テオフィリン製剤、カリウム製剤(注射剤に限る)、精神神経用剤、糖尿病用剤、臓臓ホルモン剤、抗HIV薬。